一丁墨

中村俊定文庫
文庫 18
314

宮内省図書寮

五色墨　發句

紅毒を書く撫子の筆うれし
こ袴ぬくく這ふ立ち更衣
鶏の毎日石に足を拭ふ扇
名月や点鬼簿の人通る
年つもれば生頭死ぬる胡蝶

変名神居
長水

宗瑞

別号陸林
蓮之

別号寥和
只天

変名道光
素丸

中村俊定文庫

卅五子に随ふ事久し彼ハ日毎に
宮川とこの會席に於て句ある毎に
ある時席上乃嬉戯なる句に感じて
賞しく世をしのび句ありて俳かくのことにて
さらに深く世にしりて其後ハ同志集りて末句
付合等の雑俳しりて　享保十六亥年
四時の哥仙と云ふ立花と号す判者のはじめに
誹り阮に廿五哥仙を選びて記し文に置きと
よみ文字を撰びて　寛延四年の春

馬光子は杜仲より出て前に讀書を芸術席に
三子争てむかしをしのびて子ところの
誹諧と芸者の迅なるは述しは
左擁集に披露なすのち又馬光子
没して中の一の老人をつとなる誹事
かの老人不言して志ありて見たは
吟につきて句一つへりと難はおもふ
海川に不得休居身をもて
六くの枝に及ぶ

[illegible]や土產いま
[illegible]の[illegible]
[illegible]の久か[illegible]
的場も[illegible]
十六[illegible]一処かこゐる
[illegible]
[illegible]
[illegible]
代[illegible]の[illegible]

寒和

[illegible]や恋の方便
[illegible]乃[illegible]
只[illegible]通[illegible]桃灯の後
[illegible]
何[illegible]
[illegible]
[illegible]
人間乃[illegible]
[illegible]

釋奠所名を此所に移す　お石地
樓　船橋　大堀川
弓張　長方　五如　七ツ　大堀川
苺　の　移　峡　天八　帯　友
情　海　の　清　ま　と　遠　天　て　ら　れ　い
遠　雷　の　境　の　み　秋　蛙
弓　張　く　や　情　く　と　降　ら　て　振　高
蕎　麦　切　麦　切　の　や　り　と
海　お　し　ま　く　ま　り　夕　所　る

お　秋　樓　の　秋　を　す　ま　く　い
志　な　て　ま　秋　月　を　戻　り　の　拔　す　拂
す　浪　之　孫　む　の　浪　を
樓　の　屋　宵　く　ふ　を　宵　く
家　を　八　日　や　十　二　日　や　を
尾　の　侍　男　を　す　て　女　み　を
石　中　八　花　の　墨　流　や　を　祭
耳　敷　の　夜　明　な　ま　な　て　や　し
一　ツ　祭　し　一　心　月　の　俳

ふ川の景物四ツ谷あたり萬里亭一丁の
ところ畑くさなひ猫ハ花の痛とも
来りなんやかしくも君か年ふりて
土来る猫のなふし是ハ六この雅仏
めしとらハ御ひる猫の中あふひ寺

かまひすき中日　雅つゝ　士圭草

硯壽

猫やかしきなれ　夜古ハ花ろけ
見ぬ世の人見まゝし人其猫みての
なるにはし一家清くなにとかふ

橋もとの川水にたまりの猫に　晶和
浮きる水や逆ひたるゝ浮世日月　硯寿
又まてしく月治出きのまゝ猫　文東
あるふとや深ふる桃の蓮の露　杏水
折藤をふくくつきなり柴の面　路道
子猫乃水縄退いて猫深ふるる風　寒和

文衣

湯の山や猿投にかりこゝをうへ　亀山
こゝ世のひえたる根の雪も一つま　沾澄

六月雨

樹陰に茶の下煙りすきつる雨　鳳尾

[illegible]乃屋そと咲くを雨　青雲

[illegible]る男なりの梨子一番　寒和

[illegible]次

探平太平に拙や蓮[illegible]　柳陰

竹のよふ云[illegible]ん小まりの水　[illegible]水

水[illegible]や風に吹[illegible]　伊冊　鬼貫

おり[illegible]や姫[illegible]　三記

耳かきに[illegible]の[illegible]本　白雲

汐[illegible]鄙先和[illegible]　〃

[illegible]の[illegible]や[illegible]　洞後

[illegible]画讃

かハ[illegible]や安慶[illegible]　寒和

[illegible]　〃

牡丹

加賀扇

[illegible]の[illegible]富士やとこ[illegible]　沽洲

八情大名[illegible]　伊冊　百九

古墳に柿うちくや保ゆくえ　俳路
さやく受ける西京ふ軒のうちあり　山穹

苦燃

屋根ふく暑の日　松遊
百足　可圭
大象に傾城のみ　柳西
子なくして孫が逃げ暑し　宗瑞
子が家をくぶ完門乃涼ふ　雉琳
毋人のよりて涼しふ　一色

松金

二の扇ふ廊つ涼しの　沾洲
さいの鶏に後ろ重ふ　周井
鶏みもて胡麻のゆめ　涼保

武人に頃の長ひ一句
ひ姉ふくふ年れの業志
陣ひ作ふ合ふ
又ふ句一のひ
什合ふ八雑掛ふ

そなまゆ連歌誹諧にかゝり侍くち(?)に
然(?)作(?)者(?)作(?)意(?)と以(?)聖(?)侍(?)り一向
吉(?)一応なき八(は)かん(?)俳(?)諧(?)も雲(?)月(?)花(?)
になれ(?)は古(?)人(?)の心(?)学(?)の人誹諧を
如何の句(?)を作(?)とおもひて学(?)ひらさ(?)れ(?)ば
未だなき理(?)や敬(?)而(?)翁(?)の口(?)へ学(?)
正(?)風(?)誹諧をしらぬ人まれしみ(?)心(?)に
すべて(?)人(?)の(?)眼(?)して柳(?)連歌(?)は(?)誹(?)法(?)を
為(?)もし(?)〳〵実(?)事(?)に俳(?)諧(?)す(?)る(?)

なし(?)侍(?)る連歌に誹諧の心(?)有(?)ひ
誹(?)諧(?)歌(?)文(?)をも(?)相(?)構(?)へとも(?)いふ(?)の
連歌といへるは(?)哥(?)詩(?)といふ(?)者(?)
法(?)師(?)の(?)も誹諧の連歌といよく(?)法(?)
といふ字(?)を(?)忘(?)れ(?)て(?)心敬僧(?)都(?)の物(?)語(?)にも
翁(?)の(?)あ(?)ふ(?)き(?)道(?)は(?)有(?)る(?)は(?)む(?)な(?)し(?)く(?)紀(?)
人の(?)為(?)しく(?)し(?)て(?)みな(?)楽(?)
といふ(?)句(?)を(?)み(?)五色墨を(?)作(?)し(?)め(?)に(?)
此(?)腹(?)藁(?)ヲ(?)試(?)ん(?)糟(?)粕(?)ヲ(?)少(?)し(?)め(?)る(?)

付合表者行脚中の事となり
表ふむもなり〳〵判者みしよはへ〳〵や
表ひとも物の面白〳〵又おもしろ〳〵名師の
上あるもあり〳〵作者の作を嘲る
もあり〳〵判者今判者ふる〳〵判者と云ん
人ハ表合付合なれ〳〵あら上ゝ句の
用ひ様ハ其ゆへ表ひやうの筋ゆ〳〵繼ナ
ぎ表ひとく〳〵の風雅ハ人ハ人の感ル
ものとあり〳〵ん わ者〳〵付合ハ一句の続な

まるゝふぜなるん ハ連歌ハ字ゆ詠し
はうあ句ハ連歌とふの勝負〳〵觀ま
ハ詠ものハ詠かつふの〳〵ハ句表ふ
と知ひ〳〵ものり ぬ

表裏

云い歌ハ詠ものり〳〵ぬのみ 志賀
弱と表〳〵ハ業の本やふ〳〵詠てん 路道

秋

風之吹よ 萩ハ散〳〵やて 野の秋 寸龍
秋ハ野の野の ハ 鹿〳〵 東風

[illegible]　九江
秋陰や陸[illegible]ちぐはぐ　達平
せみの[illegible]人の[illegible]　沾徐
初秋や[illegible]　宋木

心中とつふやき[illegible]人の
不忠者　恋慕に沈むの[illegible]　山道

貧窮　同集

[illegible]

浄瑠璃をうたふさまも男[illegible]　宋木
わさうの[illegible]
菊や[illegible]　沾洲
初[illegible]や[illegible]　[illegible]

わの[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
のひ[illegible]　姫の[illegible]　宋木

[illegible]の[illegible]の[illegible]　押居

灯籠[illegible]　寒和

[illegible]　殺人

[illegible]　浪巷

[illegible]　法洲

[illegible]　可圭

名月や柳を[illegible]髮掻かへし　寒和

明月や[illegible]人の[illegible]　双雀

[illegible]月や[illegible]乃人の新　いろ女

一角

[illegible]の水[illegible]　晶和

三日月[illegible]　柳居

中よりの芦の[illegible]の[illegible]　寒和

享保二酉年八月二日於淺草寺角　[illegible]

[illegible]馬の[illegible]　[illegible]　洁洲

木深き乃ち嶺に秋の雲　之峯

稲雀や咄の下の秋風の篠の根の桜　水戸　沾橋

里を〻入日の煙る初霜哉　文天

秋の夜乃おもかげ知るや星の光　猪十

灸すゑ〻見るや本末乃焼の色　筑前　帰厚

狼乃鳴く通り一夢の小径　水戸　雷石

西山ひとり野分を知るぬ鶴の声　素堂

スゝきより高山高く出る月

此西句一巻ニ出れば秋峯ばかり

高山や西山千間分る色　寒和

舟引牛　活動乃庵哉　一尺

月

ゆゝしき破き傍のかみの月　宗温

皂莢に鶏の鳴こそ秋世月　寒和

鳥〻宮〻神の出雲の事　如尺

十夜

鶏の鳴く夜を明の光明寺　寒和

十夜　仏　金式のゝ字のかゝしの　級尺

子鳥（おほとり）　お接拶の為と云ふ歟

ちのみ殿のたるに隠れむや小鳥の声　寒和

村雨の打ち過ぎぬるくやちりちりと　東風

石の火打ぬるや雉子の飛千尋　文尺

大根引いふ味もあり冬ごもり　淫林

何ぞ海水赤し裸の西風ぞ　白雲

人何ぞ何ぞ問ひ合ふ冬の日本橋　水戸　弦水

冬の雨や朔日の汐来て橋ぬらす　巴洲

真っ白秋も暮れてや枇杷の花　秋尺

青ざめて冷ぬる夜の神の水　夜白

味ふや縄を止鍬の小豆ゆで　寒和

花の山ゆるくなやなやの山

嗚咽ふ花ぶきまるなやなやの山　有景亭　杜遊

同じ心ぶきまるなやなやの山

雲なるも後ぶ八重やち葉山　秋雪

文庫やこの花ぶ沸き解の雪　懐尼

柳のうち夜へ行くなやなやの山　来至

冬の雷や古寺の鐘撞く音　文陽

水仙

水仙やなほ寒さをつまらひ　馬光
冬仏の一叶の晩の咲みより　狂洋
世てもなほ高てもかしこんむ　寒和
すゝ竹の雪ふみ分る雪日和　九江

はの間や昼陽の仕方とめてこそ池の波の遠廣
なるまゝ東西遠く人のうとき時は見て分る枝
宝暦年かゝる月なるや朝の至芭　当吟
酒なくて一日寒し神しくれ　水国

寒燈に寄る心世なるも　鞍峯　傘　馬光
初雪や河原辺空に大文字　宗瑞
浦湖乃ゝの西の夜や神あそび　精十

かゝ孫の踊みて

風ふて竹乃ゝ対死の栗山子か　笙味
吹角さゝ時ゝ紫瀬田辺多ゝ　丶
待ゝ月を里旭の光ゝ仕冊　京谷
魚河岸を平屋みなゝゝ雲サル　和迪
蛍の間ゝ竹ゝ蛍サル　乖肉

雪月花

麦の芽の堤をとかす雪　紙山

雪の星いくつ数の目　〃

雪ちるも人を酔るが雪の花　〃

巨燵の〻雪施うの話を拾ひけり　晋子

くいむ〻歳雪八度年八十助と
はじめ河其角うをかくして蒲団
初雪の雪を敷初清る湖和侍
二人雪ぶし

行き〻て巨燵に寝る雪暮れもの　蓼中居　竹五翁

春　猿丸大夫高野社

梅の香や内ふ地鳥鳴水の音　泊湖

梅一輪咲く〻下鶯内を待　巴人

梅散く〻四五日白ふ高雨帝　九江

八百年年祭孔孝納

黄毒ハ未社の神に待かふ〻ふ　寒和

松梅の首引強し二注連縄　松崖

柳

池〻ら新玉敷〻ら高屋敷　雪庵

そり梅[?]おくまなし思柳かな　　腰雲堂 一牒
く[?]るより志の字志ある[?]柳かな　　兎山
打ふる[?]つ[?]く雨の[?]かな　　友松
梳る[?]さの色や雨の[?]柳　　志颯
宿やしく[?]まて[?]くて[?]　　佳節

混雑

こちら[?]や[?]も[?]む　　廿 赤代
菜の花やほくく眠る生婦猫　　[?]石
雛の[?]出るく[?]の里　　不雲

芦の雉人に[?]れて[?]もるころ　　東風
[?]ふとよ足袋[?]汐干かな　　宗鴎
京[?]の[?]出るや多武の峯　　忠慶
先達の鼻[?]さきかしがほこのな　　蓮外
ここまでも[?]しかすみかな　　幸和
吟行く[?]る哉や[?]の花　　百里
入[?]思ひ[?]　　寒和
[?]も[?]も[?]　　誠川
のらん色のここるさに[?]胡蝶かな　　百[?]

出て行や寒き雨てしえの京　白羊
よれやよれ世界の国際三年寄　蘭巴
うぐひすや弁もぬかるみの京　一尺
畑うつ人の白し切株に　其丈
もぐるる夕べ鶴の且つの雨　竹雨
松一本かすまし藤棚の奥に　水戸 減水
蓮鉢やぬるめも何れ水鏡　寒和
山の外や世の石女の水のみ　硯雪
塚ばかりの初し蔵に　尺羨

足洗ふ人ゐるあれば小鮎うれ　和風
雪もとけ月ゆるる蛙可憐ゝ
行雲の西ゆるまるるぬぐの花ゝ
画賛
つまるるハ行くるるあれば湯屋　寒林
梅
梅の家ゆゑ梅の国ゆゑ梅ゐる　秋色
一枝乃すらるや苦行山さくら　水戸 沾梅
梅のるれるるるるるる　梅十

仲漕や老宗匠の海このさて
ちる花の小原木買ん山ひの氏　寒味
さてゝ鶯ハすきやさてゝ生ゝ撫　隨之
鶯ハ笠ハ江戸撫　芦秋
人ゝや花ゝ花ゝ　六葉
一日ハ仕ハ人有ゝ花ゝ　東風
花の雪ゝ笠賣ハ　法師
雪ゝ花ゝ　恐度

（庭おの撫あり）

（久賀同志ゝ花ゝ撫ハ
上和の花ゝ撫ハ）

世中ハ死ぬ人ハ花の山　桂林
此笠ハ揚屋の清十郎　寒和
鶯元を同ゝ出ゝや笠の色　万秋
蝶花ゝ同空ゝ　寸花

（雪中梅宗山ゝ撫ハ
ゝ撫ハ
上和の花ゝ撫ハ）

綿の上ゝ富士ハ雪ゝ空　寒和

初花や老木ゝ雪ゝ解ゝす　魚木

立春

日の光り日さしも汲く元日かな　貞徳

此句今年甘露寺殿二色めあまえも

這独吟集巻頭發句　享禄三年正月九日

内宮長官荒木田

松風に杢も唯かゝる風吹日かな　守武

同第二　寛永二年卯月二日

松永氏逍遊軒

貞徳

ふる言の葉かはらの世はうつらひぬれとかはらぬものはなさけなりとこそいひてありぬめる和歌の道のこゝろなりけれ緑山の奇跡なおはしまして

きく人もなくて此世は独言なるへし名のみ残りし此世の風さえ絶えて思ひ出の名の一つも思ひ出しにけりまことにやつくりなしてかたらんとおもふことのほかにしるし置し一句を取てまことに残しあまりて其様を尽くしぬ

蓬の名も川も落けてきぬ初音かな

若水や智恵の鏡を磨くよや　嵐雪

元日は宣や当るかの立日なり　沾徳

えいのよ　元祿　新年の
初春　寒和
羽子板の絵ゑ　はかるまぬ　注林
すゑのとハ　別流の　笹の葉　柳右

歳旦　明暦三年

ほうとうよ年一つ　ふるを　花の表　雪吟
ゆるしの　ゆるしの　酒　可全

元祿　元祿八年　この　元年　則常

同　元祿三年

ゆかしさや　花の表　晨雪

世界　分　初春　百里
世界　八の　年　氷花

同　元徳三年

梳屋　ちゑ　祝の表　沽洌

延享　年　表　保　中　三　千　年　三　四　但

八月　年

蓑　預　八　月　大海　沽洌
の　ち　表　八　祝　の　香　氷尺
ゆ　ち　や　ほ　ち　ゆ　を　年　市　雅　佳節

雪阿弥か来る果てく 陳言一句　　香谷

節季候は花し顔見なりぬ古暦　　宗瑞

花鳥の果や捨てし赤いりし　　柳居

年の暮あかり借さねし欅いろ　　馬光

嬉しさはたみこと涙てそ身の暮　　珪琳

年の夜や一筆書の大禍かな　　寒和

むかしくく
年乃あやめや
本撲より

古庵翁一節の桃ヶ縁ひくより
それ程むかり世に暮く名の終りは
ゆくはち余力ありて諫す明居住の
言は後師く趣し記して国
玉年の忌に向ふ仍る家の幕
草し暮のくさんハいの軸にぞ

百年経ても花侘さ月や雪　　寒和

以一編代彫刻する人々諸の
[illegible]なるんの[illegible]老衰の[illegible]が
[illegible]葉の[illegible]
[illegible]くそなる[illegible]
[illegible]

宝暦二壬申年晩夏

高屋清兵衛板

松岸みゆき
昭和十年秋なる